

フィールディングの闘病 執筆活動と持病の相克

能 口 盾 彦

序

医療の未発達な地域や医学不毛の時代にあって、疫病から村落共同体や個人を守る為の祈祷や呪文が幅を利かせ、占い師や妖術師の類が重要な役割を担っては、科学とは無縁な怪しげな治療法を駆使した。医学と民間医療の狭間に生きた18世紀英国の文人達は、『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*) 第三篇に見られる如く、諷刺の対象の一つとして、科学の一端である医療・医術を捉えた。自己の体験を克明に、時にはフィクションを交えて紙面に織り込む所作は、転んでも唯では起きない売文家根性の現れと見てよい。だがこうした理性的反応とは別に、現代より遥かに劣悪な衛生下での死の恐怖は拭い難く、現代科学の恩恵を蒙る我々は想像する他ない。18世紀前半にイングランドで生を受け、半ばにはリスボンにて「肝硬変」¹で客死したフィールディング (Henry Fielding) を考えると、加持祈祷に身を委ねた訳ではないが、胡散臭い療法に身を委ねつつ、批判精神も忘れはしなかった。

現代病の一つ、贅沢病と揶揄される「痛風」をフィールディングは若くして持病とした。同病相哀れむ人物として、ミルトン (John Milton) やギボン (Edward Gibbon)、ニュートン (Isaac Newton) にダーウィン (Charles Darwin)、ウェズレイ (John Wesley) やピット (William Pitt) 等と、その患者は各界各層に及んでいる。作中人物にも痛風病みが見受けられ、『ハンフリー・クリンカー』(*Humphry Clinker*) のブランブル (Bramble) や『エマ』(*Emma*) のウッドハウス (Woodhouse) 等の名が思い浮かぶ。フィールディングとは言えば、僅かに残されたホガースの版画等から浮かび上がる厳つい

『言語文化』9-1 : 49 - 70ページ 2006.
同志社大学言語文化学会 ©能口盾彦

顔付きと頑健そうな体軀からは想像しがたい。だが関節の神経痛であることを考えると、病半ばでない和外見からでは分かりにくいのが実情であろう。痛風患者の闘病生活を描く近世の版画や挿絵から、膝から足先にかけて患部を固定して、ベッドや椅子に身を委ねる様子から、治療法や特効薬も無かった頃の患者の苦悩が偲ばれる。高蛋白食品の摂取がもたらす生活習慣病の一つと考えられる痛風は、動物性蛋白、特に核酸摂取の過剰から、足、手指や膝関節等に尿酸塩の沈着を生み、その結晶を免疫細胞が攻撃して組織の炎症を起こし、発作性激痛をもたらす。3、40歳代の飽食男性が患いやすく、慢性化すると腎不全等を併発するから恐ろしい。痛風は日本では極めて稀な病気であったが、食生活の欧米化に伴って1960年代から顕著となり、現在では患者数は八十万、高尿酸血症の患者予備軍は六百万人を越え、もはや一部のスポーツ選手や美食家の病に止まらない。

“beefeater” と呼称される英国人も、母国の気候風土と相俟って国民病とも云える痛風の毒牙に魅入られ、大食漢のフィールディングも例外ではなかった。リチャードソン (Samuel Richardson) との比較から、とかく男性的なイメージのみが先行するフィールディングだが、自らの健康への関心の高さは並大抵でなく、意外と神経質、繊細な印象を与えはしないか。私生活に於いて、フィールディングが暴飲暴食に陥り易い性格であろうことは否定できないが、なぜ子細に医学療法や治療者を書き連ねるのだろう。それは博識振りを誇示したい文筆家の性根に帰するかもしれない。古今東西、不老長寿や万能薬への探求熱は広く見受けられたが、フィールディングの時代もご多分にもれない。如何わしき医療関係者を揶揄・嘲笑する一方で、怪しげな彼らの医学療法を決然と葬り去らぬ、否、実生活に取り入れようとする文人の姿勢は、彼の健康不安、医療不信の裏返しと考えるとよいのではないか。本論は持病を抱えたフィールディングの奮闘振りを、彼の認めた文書や当代の医療実態に照らし、伝記研究者達の推論を交えて論及したい。

病歴

サマセット州シャーパム・パーク (Sharpham Park) にて、父エドモンド (Edmond) と母セアラ (Sarah) の長男として1707年4月22日に生まれたフ

ィールディングは、やがてドーセット州イースト・スタウア（East Stour）に移り住み、² 同地で幼年期を過ごす。1718年4月に母を失い、母方の祖母（Lady Gould）に引き取られたフィールディングは1719年にイートン校に進む。1724年には同校を終えるが、大学に進むことなく、母方の祖母の家で読書三昧の生活を過ごすのであった。この間に古典文学やセルヴァンテスにスウィフト等の作品に接し、元判事の祖父が残した法律関係の書物にも親しんだらしい。やがてロンドン演劇界に身を投じることになるが、1728年頃までの生活振りは伝記研究者の推断に委ねるしかない。健康面から見てみると、青年期のフィールディングの壮健振りは、肺病とは無縁な身体つき、並外れて長い鼻、とがった顎が突き出た厳つい顔付きに裏付けられ、活力溢れるその容姿に奔放な私生活が推測できるのではないか。伝記作家の伝えるところでは、1725年9月にライム・リージス（Lyme Regis）に暫し滞在したフィールディングは、遠縁に当たるアンドリュー嬢（Sarah Andrew）を思慕し、親戚（タッカー家）の庇護・監督下にあった彼女の略奪を画策するが頓挫させられる。セアラの遺産をめぐるタッカー親子の妨害に拉致計画はあえなく水泡に帰すが、憤憑を偲ばせる稚拙な殴り書きを残して町を去る。³ この結末から、血気盛んな彼の性癖に対する信憑性は疑い得ない。フィールディングの駆け落ち未遂事件は若気の至りと解釈できるが、彼の奔放さの証左として挙げる識者も少なくない（Battestin, 49-51）。自著のヒロイン、ソファイアに亡き妻の面影を抱く女性を登場させたり、タイトルにはかつて略奪結婚を目論んだ女性の名、アンドリューならぬアンドリュースを採択する等、作者の懐古的、情緒的な反応が際立つ。因みにフィールディングは27歳の時、即ち、1734年11月にソールズベリー在住の未亡人の娘、クラドック嬢（Charlotte Cradock）と結婚するが、両親同様、駆け落ち結婚だった。

こうした青春を謳歌する刹那に健康の不安を覚える、或いは認識する人は数少ないのではないか。放蕩者で知られる『ジョンソン博士伝』(*The Life of Samuel Johnson*)の著者、ボズウェル（James Boswell）が気に病んだのは、品行方正さを欠いた身の不始末ではなかったか。18世紀の当時、英国の若者は医学・医療及び医薬品の不備や欠如から、痛風に限らず、不治の病と言われた結核を発病する文人も珍しくなく、スターン（Laurence Sterne）もケン

ブリッジ在学中に吐血している。彼の『センチメンタル・ジャーニ』(A *Sentimental Journey through France and Italy*)も転地療養(休養旅行)にフランスからイタリアに出向いた経験に基づいている。同物語の中で、スターンが“スメルフンガス”(Smelfungus)と綽名したスモレット(Tobias Smollett)は海軍軍医として西インド遠征に従軍し、1744年にロンドンで外科医を開業する医療関係者であった。医者の不養生か、肺病をやみ、痛風や喘息を持病とし、フランス及びイタリアに転地療養に出掛け、1766年に編んだのが『フランス、イタリア周遊記』(*Travels through France and Italy*)である。健康を害したスモレットは再びイタリアを訪ね、レグホーン(Leghorn: Livorno)に滞在して1771年に脱稿されたのが『ハンフリー・クリンカー』だが、⁴ 同作品の好評を耳にすることなく、フィールディング同様、異郷にて客死した。

ロンドンに上京したフィールディングの処女戯曲『恋の種々相』(*Love in Several Masques*)は、僅か四夜の興行にすぎなかったが、1728年2月にロンドンの一流劇場であるドリュアリー・レイン劇場で上演された。無論、無名の若者が一流所で芝居のこけら落しが可能な筈は無く、又従姉のモンタギュー夫人(Lady Mary Montagu)が、当代の演劇界の実力者シバー(Colley Cibber)に仲介の労を買って出た故である。ところが、突如、翌月にはオランダ(ライデン大学)に渡って、一年五ヶ月余り遊学するフィールディングであった。このオランダ滞在期間を除き、劇作家のペンを折る契機となった1737年6月の「劇場封鎖令」(the Licensing Act)発布に至る七年余りの間に、大小二十五篇余の笑劇(farce, burlesque)を書き上げ、「小劇場」(the Little Theatre)とは云え、自前の劇場運営にも携った。フィールディングの劇作家時代を、彼の最初の伝記作家マーフィ(Arthur Murphy)は、青年時代の作者を見知ることなく、予断と偏見に満ちた作家論を展開した。⁵ マーフィに準じれば、劇作家フィールディングはかなり放蕩な私生活を過ごしていたらしい。クロスによれば、実際、暴飲暴食の気があったらしい。⁶ ゲイ(John Gay)が1728年に発表した『乞食オペラ』(*The Beggar's Opera*)の大成功に刺激された劇作家フィールディングは、1731年4月22日に『ウェールズ・オペラ』(*Welsh Opera*)の初演を迎えた。次いで1731年6月11日には時事的言及と歌を加えた改訂版『グラブ街オペラ』(*Grub Street Opera*)の初演

に漕ぎ着けた。改訂版の歌の中でも、“The Roast Beef of Old England”は好評で長年に渡って幕間に流されたと云う。⁷ メロディは借り物でも、フィールディングが大いに歌い、飲んで好物を食したことが分かるかと云うもの。私生活と作者の分身の重複は別として、『トム・ジョーンズ』(*Tom Jones*)の主人公の潑刺とした活躍振りや「山の男」の話(VIII: xi-xv)、『ジョウゼフ・アンドリュース』(*Joseph Andrews*)のウィルソンの脱線話(III: iii-iv)等から、作者の青春時代を想起する読者も少なくないであろう。『アミーリア』(*Amelia*)のマシューズ嬢(Miss Mathews)とヒロインの夫、ブース(Captain Booth)が再会する「債務者拘留所」(sponging house)の実体に示唆される下層社会の淫らな生活描写から、その世界に精通した作者の資質が問われた嫌いがあった。フィールディングの劇作家時代を詳述することは本題を逸脱することから、フィールディングは当代一流の笑劇〔1730年の『作者の笑劇』(*The Authour's Farce*)、1731年の『悲劇中の悲劇、トム・サムー一代記』(*The Tragedy of Tragedies, or the Life and Death of Tom Thumb the Great*)や1736年の『落首』(*Pasquin*)]の数々を残したと指摘するに止めたい。

速筆かつ多作な執筆活動による不規則な文筆生活が想像されるが、これまで病魔とは無縁と考えられたフィールディングに持病の兆候が現れたのも、実はこの劇作家時代ではなかったか。新進気鋭の舞台俳優ギャリック(David Garrick)とフィールディングの親交振りはよく知られているが、⁸ フィールディングが痛風のために患部を固定していたことは、シェイクスピア俳優の知るところとなった(Battestin, 364)。友人のハリス(Robert Harris)はフィールディングの病状を案じ、二度ばかり手紙を書き送っている(Battestin, 352-3)。痛風との取り組みを偲ぶこうした縁も伝記作家の推断を典拠とする一方、演劇界での獅子奮迅の活躍振りから、読者は痛風に苦しむフィールディングの姿を想像し難い。

次次にウォルポール批判を強めたフィールディングの政治諷刺に端を發し、1737年6月に公布された「劇場封鎖令」で、フィールディングは劇作家のペンを断たれた。そこで同年11月に祖父グールド縁の「中央法学院」(Middle Temple)に所属し、猛勉強の末、1740年6月には晴れて弁護士に登録され、法曹界への転出を果たすフィールディングであった。だが開店休業

状態の弁護士稼業で如何に持病と対峙したのか。生計の為、それまで認めていた詩作や中篇小説など、大小40余作の集大成を狙い、フィールディングは『雑文集』(Miscellanies) 編纂に当たる。友人のアレン(Ralph Allen)やポウブ(Alexander Pope)の好意に対し、フィールディングは謝辞を呈している(Battestin, 356)。予約購読形式が採択され、当初の計画では1742年6月に募られて年度内での出版予定だったが、実際に三巻本として上梓されたのは1743年4月のことだった。遅延の理由として、加筆・修正と改編作業等が当然のごとく推測される。妻シャロットの病の進行が遅延の最たる理由とするダデン説によれば、1742年のクリスマスまでに発刊の運びであったが、フィールディング夫人の病で遅延、結局、翌年4月の出版となった。⁹ だが編集者の持病悪化説は採択されないのか。1742年6月の出版予告の中で、フィールディングは同書の出版遅延は昨年の冬期(1741-2)での自身の体調不良(the author's indisposition)であるとしており、痛風の発作に、前年に次いで今冬(1772-3)も、見舞われたのではなかったか。¹⁰ 因みに『雑文集』は時の皇太子やウォルポール(Robert Walpole)をはじめとする政財界、法曹界、ギャリックや女優クライブ(Kitty Clive)に劇場支配人フリートウッド(Charles Fleetwood)等の演劇関係者等、都合427名から556セットの申し込みを受け、予約金は770ギニーに達した。予約者の半数以上が法曹界関係者で、この事実が彼の後半生の治安判事としての活躍を促す契機となったではなからうか。医学関係者として、後年、1745年10月5日にテンプル近くのエセックス・ハウスにいたフィールディングは、ソールズベリーの著名な医師バーカー(John Barker)と談笑する機会を得たが(Battestin, 399)。元来、同医師夫妻とフィールディングは昵懇の間柄で、夫はフィールディングの『雑文集』を、夫人はフィールディングの実妹セアラ(Sarah Fielding)の『おなじみ書簡集』(Familiar Letters)の予約購入者であった(Battestin, 666n236)。

フィールディングが痛風治療に頻繁に利用したのはイングランド西南部の保養地バースで、鉱泉飲用の効能でも知られている。フィールディングがバースの湯治の効能を国王ジョージ二世の首席外科医ランビー(John Ranby)から推奨された事からも分かる様に、¹¹ バースは当代医療の中核を担うまでになった。紀元一世紀のローマ時代に早くも温泉地としてその名が刻まれて

いたバースではあったが、ローマ軍が紀元五世紀の始めにイギリスから撤退後、同地は温泉都市機能を消滅させ、中世前半には宗教都市の機能を担うようになる。やがて織物都市から中世後期には温泉治療を目的とする湯治場として復活し、エリザベス女王も非公式ながらバースを訪問している。清教徒革命の嵐と混乱を経て、王政復古後にバースの温泉地としての復活が成った。チャールズ二世がその下地を作り、アン女王も1702年に同地を訪れている。¹² やがて“Beau Nash, King of Bath”として知られるナッシュ（Richard Nash）の登場によって、18世紀の湯治と社交のリゾート都市、バースの誕生を見るのである。フィールディングの時代は正にナッシュの活躍時と符合し、バースは社交界のメッカ、リゾート都市として復権を果たすのであった。

バースは妻シャロットを伴って彼女の故郷ソールズベリーに帰郷する際には必ず訪れるフィールディングお気に入りの場所で、夫婦は社交より湯治を優先した。1742年のバース滞在を契機に、毎年、時に数ヶ月間同地に滞在するようになった。¹³ フィールディングが訪れる際には、市の中心部から一マイル半南方、エイボン川に臨むテュワトン（Twerton）に長期滞在するのが常だった。バースの医師としてはオリバー（William Oliver）がとみに有名だが、当地の二人の医師（Drs. Thomas Brewster & Edward Harrington）と鉱泉の効用のお陰で、一時的だがフィールディングは健康回復を果たした、と友人のハリスは伝えている（Battestin, 357）。1743年9月から年末まで長期滞在を余儀なくされたフィールディングは、友人への9月6日付の書簡の中で、妻シャロットの病状悪化を明らかにする（Battestin, 375）。当時の最先端医療を目指す病院が、オリバー医師やナッシュ、フィールディングのパートナーで友人でもあった実業家アレン（Ralph Allen）や建築家ウッド（John Wood）等の協力でバースに設立されたことも、湯治場機能を拡充し、バース隆盛の礎となった。アレンは石材業と郵便事業で成功し、彼の邸宅（ブライアー・パーク）が『トム・ジョーンズ』のオールワージの館（パラダイス・ホール）のモデルになったと云われている。¹⁴ アレンがオールワージの实在モデルと称せられ、同物語で理神論者として登場する哲人スクエアー（Square）は、バースの内科医でフィールディングの治療を担当したハリントン、プリュスター両医師に余命幾許も無しと宣告される（XVIII: iv）。

1748年の早春、痛風の痛みフィールドリングは再び襲われ（Battestein, 434）、旅することは無論のこと、立ち居振る舞いも不自由だったが、¹⁵ 激痛に苛まれながらも、彼の旺盛な創作意欲は損なわれなかったものと判断される。その証として、前年の12月から週刊の『ジャコバイト新聞』（*The Jacobite's Journal*）を刊行し、主宰として任に当たる一方、翌年2月に『トム・ジョウンズ』を刊行する経緯が考えられる。1748年の夏には痛風の痛みが薄らいだらしく、7月から9月にかけてフィールドリングは旅行を楽しむ。多忙を極める中、持病との付き合いを彼はよく弁えていたようだ。この間、ウスタ州（Worcestershire）ハグリー・パーク（Hagley Park）に出向き、政治家でパトロンであるイトン校の学友リトルトン（George Lyttelton）と旧交を暖めたりしている。¹⁶ 勿論、痛風の発作から免れた訳でなく、夏季より冬季に痛風の症状が出やすいのがこの病の特徴で、バテスティンはフィールドリングの時間的経過を次の様に記している。

From our distant vantage point, Fielding disappears from view from early July until late September 1748. He may have journeyed to Worcestershire to visit Lyttelton, the patron of *Tom Jones*, at Hagley Park, where, in late August, Pitt also made one of the company. From Hagley it would be an easy journey to Radway Grange, Warwickshire, the home of Lyttelton's friend Sanderson Miller (1717-80), . . . According to a pleasant tradition in Miller's family, it was during a visit to Radway Grange that Fielding read aloud from *Tom Jones* to a group including Lyttelton, Pitt, and Miller—in order to sound their opinion of the manuscript before submitting it to the printers. . . (Battestein, 441)

1748年の夏に『トム・ジョウンズ』の原稿を朗読・披露する為には、春には脱稿せねばならないと考えるのが道理であろう。この辺りのフィールドリングの動静を他の評伝家達はどうか捉えているのか。ダデンに拠れば、1746年6月から1748年11月にかけて『トム・ジョウンズ』は認められ、以後は献呈の辞と出版のための修正に当てられたらしく、¹⁷ バテスティン同様、ミラー

邸での『トム・ジョウンズ』朗読の逸話が確認される。¹⁸ 同じくクロスモ『トム・ジョウンズ』上梓の貢献者としてリトルトンとアレンを挙げ、“The thousands of hours that Fielding, already becoming infirm with the gout, was able to devote to “Tom Jones” were clearly distributed over the three years, 1746-1748.”¹⁹と、執筆経緯と痛風の相関関係を推論している。

次に治安判事時代のフィールディングの病状を見てみよう。1748年10月上旬にフィールディングは念願の治安判事としての生活を始めた。先ずウェストミンスター地域の治安判事就任に際し、大恩あるベッドフォード公爵(John Russell, 4th Duke of Bedford)の代理人と最終的な手筈を整えるべく、法廷(the Swainmote Court)に出向く予定だったが、痛風のためトウイケナム(Twickenham)の自宅からの書簡でフィールディングは断りを入れている(Battestin, 446-7)。さらにハリスへの手紙の中でも、痛風の痛みで病床に伏す為、口述秘書(an Amanuensis)を必要とする旨を記すあたり(Battestin, 447)、フィールディングの闘病、特に痛風の苦痛に如何に苛まれたかが、この時期に符合するのではないか。ロンドンにはボウ・ストリート(Bow Street)で治安判事の任に当たるが、11月上旬頃から痛風の痛みが益々募り、手足は不自由となり、ベッドフォード公爵の口添えで1749年4月にミドルセックス州全域を統括する治安判事に就任する手筈が整うも、公爵へ答礼に出向くことは叶わず、文にて謝辞を呈するばかりであった(Battestin, 449)。

前後するが、フィールディングの身辺を探ってみよう。ボズウェル・コート(Boswell Court)に居を構えていた1747年11月に先妻シャロット(1744年11月に逝去)の侍女ダニエル(Mary Daniel)と再婚し、翌年の2月には長男ウィリアムが誕生する。フィールディング40歳、新婦メアリーは26歳の初冬の事であった(Battestin, 422)。当時はセアラも兄の家に間借り(Battestin, 412)していた事から、感ずるものがあっただろう。先妻の侍女との再婚は、政敵は無論のこと、ウォルポール(Horace Walpole)やスモレット等からも顰蹙を勝ったようだ(Battestin, 423)。同じ屋根の下、出歩くこともままならぬ主人と侍女との秘め事が白日の下となった訳だが、これも痛風のなせる業か。こうした事実婚に誹謗・中傷も囁かれたが、旧友のリトルトンはこの結婚を是認し、内輪の式では花嫁の父親役を果たしている。²⁰ 1749年暮に

メアリーとの二番目の我が子、メアリー・アミーリアが誕生するが夭折、12月17日にフィールディングはコヴェント・ガーデンの聖ポール寺院に葬っているが、ほぼ同時期に彼自身も高熱で体力消耗の上、痛風の発作にも悩まされた。²¹ フィールディングと懇意だと自称するリンネル商上がりの詩人兼劇作家ムア（Edward Moore）の書簡によると、歩行困難なフィールディングは部屋から部屋へ車椅子で移動していたらしい（Battestin, 495）。

パースに出向けない際、ロンドンでフィールディングの治療に当たったのが、痛風と疱瘡の権威トムソン医師（Thomas Thompson）であった。同医師の治療法は仮説に偏せず、自然治療に徹する療法で、同業他者と比べても遙かに患者の死亡例は少なく、顧客には時の皇太子（Frederick Prince of Wales）や側近で下院議員ダッシュウッド（Sir Francis Dashwood）やフィールディングの友人である政治家ドディントン（George Dodington）等を数えたが、1746年に風邪を患った政治家ウィニントン（Thomas Winnington）を医療ミスで死亡させた事が彼の評判の失墜に繋がった。²² 同医師に対して藪医者印象を抱いたのか、フィールディングはハリス宛の書簡で同医師の処方兄弟のトマス・ハリスに薦められないと記している（Battestin, 496）。帝都でフィールディングの評価が高かったのは、コヴェント・ガーデンの解剖学者兼外科医のハンター医師（William Hunter）で、²³ フィールディングは偉大な外科医で友人であると称した。²⁴ 病状は青息吐息の様相を呈したところへ、1750年7月に長姉キャサリンが47歳の誕生日を前に亡くなり、先妻との唯一の息子ヘンリーも同じく「監獄熱」(jail fever, a virulent strain of typhus)で相前後して亡くし、心身ともに疲弊したフィールディングであった。ヘンリーは1750年8月3日、ロンドンのマーティン・イン・ザ・フィールズに母シャロツテ、姉シャロツテのそば近くに埋葬された。「監獄熱」とはニューゲイト（ロンドンにあった刑務所、1902年に取り壊された）に収容された囚人間に広まり、オールド・ベイリー（the Old Bailey, the Central Criminal Court）も汚染され、時のロンドン市長をはじめとする著名人も犠牲者に数えられた（Battestin, 506）。

幸い、フィールディング自身は「監獄熱」の毒牙から免れたが、疫病忌避の為もあってか、ロンドンからパースに出向いている。パースで鉱泉を摂取

し、前出の両医師、ブリュスターとハリントンの痛風治療のお蔭で小康を勝ち得たフィールディングであったが (Battestin, 357)、喘息の気配のためか、サマセット州グラストンベリー (Glastonbury) に足を向けた。病身をおして何故この時期にグラストンベリーまで出向いたかと云うと、チャンセラー (Matthew Chancellor) という三十年来の喘息病みの男が、夢の中で天使のお告げを聞き、同地の水をコップ一杯飲むと、忽ち完治したとの噂話がバースでも話題を呼んだ為であろう。迅速なその対応振りから、フィールディング自身も喘息を患っていたものと推測される (Battestin, 525-6)。1751年7月頃にはロンドンでもグラストンベリー水の瓶詰めが販売されたというから、商魂の逞しさは何処も同じ。インチキ臭い水の効能をめぐる議論を呼んだが、フィールディングには好結果を招いたのか、批判めいた反応は見受けられない (Battestin, 526-7)。だが治安判事としての彼の法廷活動に散見されたように、²⁵ 科学的根拠に欠ける対象に情緒的な反応を示すフィールディングの性癖がここにも指摘できるのではないだろうか。特效薬 (panacea) とならぬことは、フィールディングの体調が抜本的改善に繋がらなかった事から、グラストンベリーの水摂取はフィールディングの好奇心旺盛さと、藁をも掴む患者心理を伝えている。

フィールディングに黄疸の症状も出てきたことから、バースでの湯治が急務となったが、治安判事の任がバース行きを阻むのであった。

... though my distemper was now turned to a deep jaundice; in which case the Bath waters are generally reputed to be almost infallible. But I had the most eager desire of demolishing this gang of villains and cut-throats, . . .²⁶

上記の引用は『リスボン渡航記』の「著者による序文」 (Author's Introduction) の前半部からだが、直後の箇所では馬車にたった六マイル乗るにも耐えがたい疲労を覚え、“Mine was now no longer what was called a Bath case; . . .”²⁷と記されていることから、バースでの治療も最早断念せざるを得ない旨の告白に他ならない。因みにロンドンとバース間は116マイル、当時の駅馬車で夏期の特別運行時ならまる二日、通常はまる三日を要したといわ

れる。

悪に立ち向かう熱血治安判事の限界を示唆する適例として、キャンニング嬢 (Elizabeth Canning) の狂言にフィールディングが翻弄された顛末が挙げられる。ロンドン社会に戦慄を引き起こした少女誘拐事件は、1753年1月1日の夜九時過ぎに親戚の家から家路についたキャンニング嬢は、ムアフィールズ辺りで二人の悪漢に金品を奪われた挙句、無理やりユダヤの老女 (Mary Squire) が束ねる淫売宿然の隠れ家に連れ込まれる。狭苦しい部屋で粗食をあてがわれて拘束されること29日、隙を見て窓を打ち破って逃走・帰還する乙女の話は、ユダヤの老女とパミラと思しき少女の取り合わせから、ロンドン市民にリチャードソンの幽閉・監禁の世界を髣髴させた。パミラを拘禁する卑劣なジュークスもどきの老婆に監禁されたとの乙女の証言は、最終的に狂言であることが判明し、フィールディングが認めたのが『エリザベス・キャンニング事件の真相』(*A Clear State of the Case of Elizabeth Canning*) で、1753年3月20日に従前同様、印刷業者ミラー (Andrew Millar) によって刊行された。同書は治安判事の面目を逸したフィールディングの弁証の為の小冊子である。少女の狂言話にすっかり振り回された格好のフィールディングは、事件の前後から極度の疲労を覚えていた (Battestin, 572)。事実、1753年当初からフィールディングの病状は執務に支障をきたす程で、その様子を偲ばせる銅版画 (Battestin, *Plate 63*) が幸いにも残されている。



Plate 63 *The Conjurors* (1753), showing Elizabeth Canning, Fielding, Sir Crisp Gascoyne, Dr. John Hill, and Mary Squire.

画面からも杖が無ければ立つ事もままならぬフィールディングと思しき人物が裁判の象徴である天秤を携えてエリザベスの右に立っている。彼の両脚が異常に太いのも、患部を固定する為、足首から太股にかけて包帯できつく巻き上げるテーピング治療を受けていた為であろう。実際に、歩行困難を知らしめる文も残されている (Battestin, 525)。

フィールディングは治安判事としての集大成として、1751年1月に『近時盗賊が急増せし原因究明、並びにその対策についての一建言』(*An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers, etc. with Some Proposals for Remedying the Growing Evil*) を、1752年4月に『神の介在によって殺人が露見し、また罰せられた実例の数々』(*Examples of the Interposition of Providence in the Detection and Punishment of Murder*) を、さらに1753年1月に『貧民に適切な食を与え、彼等の道義心を正し、彼等を社会の有用たる民とならしめる為の一建言』(*A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor, for Amending their Morals, and for Rendering them Useful Members of the Society*) 等を文書化した。今日のロンドン警視庁、スコットランド・ヤードの礎となった警察組織構築に尽力する司法行政官としての姿がそこにある。一方、ジャーナリストとして1745年11月に『真の愛国者』紙 (*The True Patriot*) (翌年6月まで) を、さらに1747年12月に『ジャコバイト新聞』(翌年11月まで) を発刊し、フィールディングはそれぞれを主宰するのであった。加えて1749年2月に『トム・ジョウンズ』を、1751年11月には『アミーリア』を上梓したことから、疲労困憊、病による体力消耗も加わってダウン寸前ではなかったか。今や痛風のみならず肝硬変の症状、即ち水腫と診断される症状を呈するのであった (Battestin, 577)。やむなくフィールディングは1754年4月にモドルセックス及びウェストミンスターの治安判事職を辞し、盲目の異母弟ジョンに同職を委ねるに至る。

フィールディングの病状はさらに悪化し、かつて彼の諷刺の矢面としたウォード医師 (Joshua Ward) (Battestin, 582) の^{とうかんしん}套管針 (trochar) 治療を幾度となく受け、信じがたい程の腹水の抽出を見た。²⁸ ウォード医師の腹水抽出も捗捗しくないことを悟ったフィールディングは、この頃から民間療法を片端から試みている。痛風治療として“ミルク・ダイエット”を、²⁹ 次にア

イルランドの英国国教会の聖職者として著名なパークレイ主教 (George Berkeley) が推奨する“ タール・ウォーター ”(. . . Bishop Berkeley's treatise on the virtues of tar-water. . .)³⁰の杯飲を繰り返す。朝夕にタール水半パイントを摂取する事で、一時的に食欲も回復したようだが、再度套管針の世話にならざるを得ず、その処理間隔も次第に短くなり、遂に転地療法が検討されるようになった。先ずプロヴァンス地方のエクス (Aix en Provence) が考慮されたが、長距離馬車での移動が障害となる。マルセイユ (Marseilles) が次にリスト・アップされたが、船便の手配に時間を要することから、旺盛なポルトガル交易による船便 (the *Queen of Portugal*) の確保が可能なリスボン (Lisbon) が採択された。³¹ そうこうする内にも、フィールディングの病状は一向に改善の兆しを呈せず、6月20日には夕刊紙の一つにフィールディングの死亡記事が掲載される始末。翌々日の22日になって『パブリック・アドヴァタイザー』紙 (*Public Advertiser*) で漸く否定されたが (Battestin, 585)、世間は文豪の生命も風前の灯と判断したのだろう。後日談となるが転地療養先のリスボンで同年1754年10月8日にフィールディングは亡くなるが、死亡の知らせが今度は驚きをもって受け入れられたとか。それは8月7日にリスボンに到着したフィールディングが急速に健康を回復したとの例の『パブリック・アドヴァタイザー』紙の10月16日付けの記事、(Letters by the last Mail from Lisbon advise that Henry Fielding, Esq. is surprisingly recovered since his Arrival in that Climate. His gout has entirely left him, and his Appetite returned.)³² が為であろう。記事の直後に訃報が飛び込んだものと推察される。

時は前後したが、治安判事を辞職したフィールディングがロンドン市内のボウ・ストリートから移り住んだのが、郊外のフォードフック (Fordhook) の借家だが、瀟洒な館 (バイロン夫人 <Lady Byron> も気に入ったとか [Battestin, 584]) からフィールディングは旅立った。リスボン行きに同行するのは、フィールディング夫人、先妻の次女ハリエット (Harriet)、友人の娘コリアー (Margaret Collier) に男女の召使 (William, Isabella Ash) の計六名であった。1754年6月26日の正午に一行はフォードフックの自宅から迎える馬車に乗り込む。妹のセアラは鉱泉治療でバースに滞在していた為に見送りに立ち会えず、友人のウェルチ (Saunders Welch) とマーガレットの妹コ

リアー嬢 (Jane Collier) はテムズ川南岸のロザハイズ (Rotherhithe) の波止場まで一行と同行した。³³ 今生の別れと思しきフォードフックでの離別に際し、フィールディングは再び故国の地を踏めると思っていたのだろうか。家族に惜別の情を抱き、最後の別れを惜しんだものと推測される。帆船「ポルトガルの女王号」が係留されているロザハイズまで二時間の馬車の行程であったが、岸壁から乗船する方が揺れる車中の苦行に耐えるにもまして難儀な作業となった。先ず小船に乗り込む必要があったが、痛風ですっかり手足が利かなくなったフィールディングは人夫達の助けを必要とした。試行錯誤の末、舳からようやく椅子駕籠に載せられたフィールディングは、船荷同然に滑車で船上に引き上げられる。その間、衆目監視のもと、水夫や人足達の嘲りや蔑みの中、やっとの思いで帆船に乗り込むフィールディングであったが、今更ながら自己の症状を確認させられたことだろう。

リスボンへの航海は前稿に詳述したことから、³⁴ ここでは新事実を中心に論を進めたい。「ポルトガルの女王号」でのフィールディングの立ち居振る舞い、否、振る舞いに関する陳述は旅日記が為に多分に主観的なことは否めないが、筆者の心情がよく分かる。同行する家族やヴィール船長 (Captain Richard Veal) 以下の乗組員達に対する筆者の心理分析は鋭く、頭脳明晰、病による意識の混濁など微塵も窺えない。家族らは船酔いに苛まれるがフィールディング唯一人、旺盛な食欲を発揮する。³⁵ 陸での移動に気を使うより、いったん乗り込んでしまえば、狭い船内が案に相違して楽、自由の利かない者にとって逆に幸いするかの実例である。克明な日記にフィクション

子猫の水難と呆気無き最後、サメが海水に吊るした塩漬け牛肉に食らいつく件等を織り交ぜる彼の筆致には、新たな旅行記を認める旅行記作家の意欲が感じとれる。ロンドンからリスボンへの旅程は、フィールディングの遺作となる旅行記である『リスボン渡航記』(*The Journal of a Voyage to Lisbon*) の時間の経緯に従い、迫真的記述で記されている。だがリスボン上陸後の筆者の動静に関する記述は一切見当たらない。リスボン滞在で健康回復を果たしたフィールディングは、ベラムやリスボンを巡るツアーに参加したとの風聞が、前述したロンドン市民の驚きの表明となったのかもしれない。リスボンでのフィールディングの暮らし向きは今となっては現存する三通の

弟ジョン宛の書簡と友人ウェルチ (Saunders Welch)、ミラー (喪失されたが内容伝播) への私信に頼るしかない。弟に冬物衣類を送付するように依頼したり、リスボンの気候の良さを伝え、当地の物価高への不平を述べたりすること等から (Battestin, 596-8)、筆者の生還への期待、生への執着を読み取れないだろうか。

結論に急ぐ前に、フィールディング最晩年に生じた不測の事態に着目したい。論者を含め、フィールディング愛読者は作者が死出の旅に出立した悲劇性に目を奪われがちだが、フィールディングの後妻、メアリーの母の存在に気を留める人は少ないのではないか。フィールディングがリスボンで客死する一週間前、即ち10月1日頃ロンドンの留守宅を預かっていたメアリーの母 (Elizabeth Daniel) が庭の端にある物置小屋 (the Necessary-House) で、跪いて頭をたれ、喉を切り裂いた失血状態で見つかった (Battestin, 609)。覚悟の自殺とは言え、彼女の自刃の果たす意味は大きい。パテスティンは “Distressed as she was in mind, she would leave no mess behind for others to clean. Though a suicide, she was nevertheless buried on 3 October in consecrated ground, at St. Mary’s, Ealing.” と陳述するに止まっている (Battestin, 609)。論者は先に同じ屋根の下云々と示唆したが、先妻キャサリンの侍女、わが娘に主人の子供達が如何に懐いているとは云え、出自の定かでない二十台半ばを超えた田舎娘の行く末を案じるのは、パミラの母ならずとも安穩であろう筈が無い。夫の支えが有れば救われたかもしれない。ところがフィールディングは以前に論証した如く、³⁶ 火宅の人では義母も心休まらなかったのではないか。娘婿は若くはないが世間に知られた物書きで羽振りが良いとの触れ込みだったが、実際の家計の遣り繰りから、彼女が一家の先行きを悲観したとしても不思議ではない。友人知人に限らず、パトロンから借金を繰り返し、さらには出版業者から寸借する娘婿は、身体を壊して転地療養を口実に異国に旅立つ始末。後を頼むとばかりに幼子、乳飲み子を押し付けられて、彼女はてんでこ舞いの “おさんどん” 生活を、何時果てるとも分からずに送らざるを得ない。エリザベスの年齢は不詳だが、娘の年齢からすると五十半ばと考えられる。高齢者社会の現代ならいざ知らず、乳飲み子を含めて幾人もの孫を預かれば、体力的にもかなり厳しいものがある。娘の嫁ぎ先が豊かで、留守

を預かるにも金銭の不安が無ければ自殺など毛ほども頭に浮かぶことは無かったに違いない。だがリスボンへの六人分の渡航費や滞在費、予備費をなげなしの有り金から捻出したと想像される故、留守家族の蓄えに余裕などある筈が無い。主人の出奔を聞きつけた借金取りが留守宅に現れなかった保証は無かる。家の窮状を知れば知るほど前途に希望を抱けないのは明白極まりない。老女の自殺を単に精神を病んだ末の自暴自棄と処断されてはならず、それは彼女の埋葬の有様が全てを物語るのではなからうか。娘が母の死を知った時の衝撃は、母の心痛を思えば一層切なさが募り、胸引き裂かれる思いがしたことであろう。兄の死後、残された遺族の為に奔走する盲目の弟ジョンの、³⁷義姉への深慮の程が改めてよくわかる。

結

イングランドの陸地沿いにポルトガルを目指す「ポルトガルの女王号」の船上で再び腹部は膨れ上がり、フィールディングは1754年7月25日に五度目の套管針処置を受け、9クオート（1 quart=1.136 litre）もの腹水が抽出された。だがその後に水腫の兆候は言及されず、『リスボン渡航記』に痛風で苦しむ筆者の姿は見受けられず、喘息の兆候も見られない。船酔いに苦しむ家族を尻目に、旺盛な食欲を筆者は発揮する。洋上で潮風に当たったことが、³⁸彼の健康回復に幸いしたのであろう。漸くリスボンに到着し、南国の日差しに一時的に健康回復の兆しも窺えたが、薬石効無く異国の土に帰したフィールディングにとって、転地療法に果たして意味があったのだろうか。

五十歳にも満たぬ人生で、フィールディングは持病の痛風や喘息に加え、黄疸や水腫を患いながら、折々の痛みに耐えつつ、劇作家として、ジャーナリストとして、小説家として、また治安判事として責務を全うした。人生の節目に持病が再発する皮肉な巡り合せに、萎える事無く、気力を奮って難局に立ち向かう姿勢は並外れたものがある。フィールディングのこの負けじ魂、闘争本能が彼をしてどの分野でも当代一流の人物ならしめたのだろう。不屈の精神力と旺盛な好奇心で持病と立ち向かい、当代の医療関係者や治療法を諷刺の対象と化すユーモア精神を有し、胡散臭い仮説を実践するだけの柔軟性を彼は持ち合わせていた。同郷の誼か、パーカー医師とのロンドンでの親

交振りが示唆するように、フィールディングの交遊録の中でも、医師との交流は顕著である。自身や家族を巻き込んだ闘病生活が、否応無く医師達との交際の輪を広げさせた結果であろう。転地療養に出かける旅程を旅日記に仕立て上げるのも、作家魂の発露と解釈でき、残された家族の生活を想う家長としての自負心が確認できる。病と立ち向かう闘病生活を物書きの種と転じさせ、泰然自若とした姿勢から、病との付き合い上手なフィールディング像が見えてくる。持病との闘病生活が、短くも充実した人生を送らせた起爆剤と成ったのではないか。

註

- 1 Martin Battestin with Ruthe Battestin, *Henry Fielding: A Life* (London: Routledge, 1989), 577. 以下、註25を除き、頁数は全て同版により文中に記す。
- 2 Ronald Paulson, *The Life of Henry Fielding: A Critical Biography* (Oxford: Blackwell, 2000), 5-6.
- 3 或る民家の戸口に、“ This is to give notice to all the world that Andrew Tucker and his son John Tucker are clowns and cowards. Witness my hand, Henry Fielding. ” とする紙面が糊付けされていた。
Cf., Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952), 1: 18.
- 4 Roy Porter and G.S. Rousseau, *Gout: The Patrician Malady* (New Haven: Yale University Press, 1998), 94.
- 5 Frederic Blanchard, *Fielding: the Novelist* (New York: Russell & Russell, 1966), 158.
- 6 Wilbur Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell & Russell, 1963), 3: 1.
- 7 Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 109.
拙稿、「フィールディングとヘンデルの接点」『言語文化』第7巻第1号（同志社大学言語文化学会、2004）、60.
- 8 Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 371-4.
- 9 Dudden, *Henry Fielding*, 1: 413; Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 381.
- 10 Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 375.
- 11 Henry Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon* (London: J.M. Dent & Sons, 1964), 191. ランビー医師は同じくジョージ二世の侍医であるミード医師(Richard Mead)同様、当代きっての名医の誉れ高く、『トム・ジョウンズ』第17巻第9章では主

人公との決闘で負傷したフィッツパトリックの治療に“the King’s Surgeon”(911)として登場し、『アミーリア』第5巻第5章でも“a very eminent Surgeon”(211)として、作者の賛辞を得ている。また『トム・ジョウンズ』第8巻第13章の「山の男」の話で、追剥にあった男の傷の手当てを頼んだRで始まるロンドンの外科医に関し、“This Surgeon, whose Name I have forgot, tho’ I remember it began with an R, had the first Character in his Profession, and was Serjeant-Surgeon to the King. . .”(468)とあるが、「山の男」が1685年のモンマス公 (James Scott, Duke of Monmouth) の叛乱 (同年6月蜂起、7月6日、サマセット州セッジムア (Sedgemoor) でジェイムズ二世軍に鎮圧された) に参加したことを考えると、主人公が1745年の若僧王討伐軍に従軍したと辻褄があわない。因みにランビー医師はフィールディングに助言を与えた最後の医師と云われ、フィールディング亡き後、フォードフックの土地を借り受けたのも同医師である。

Cf., Henry Fielding, *The History of Tom Jones a Foundling*, ed. Fredson Bowers. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding” (Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1987); Henry Fielding, *Amelia*, ed. Martin Battestin. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding” (Oxford: Clarendon Press, 1983).

12 蛭川久康、『パースの肖像』(東京: 研究社、1990年) 53-5頁。

13 Cross, *The History of Henry Fielding*, 1: 379.

14 小林章夫、『地上楽園パース』(東京: 岩波書店、1989年) 76-93頁。

15 Donald Thomas, *Henry Fielding* (New York: St. Martin’s Press, 1991), 278-9.

16 Blanchard, *Fielding*, 27-8.

17 Dudden, *Henry Fielding*, 2: 585.

18 Dudden, *Henry Fielding*, 2: 594-5.

19 Cross, *The History of Henry Fielding*, 2: 100.

20 Dudden, *Henry Fielding*, 1: 543.

21 Cross, *The History of Henry Fielding*, 3: 3.

22 Cross, *The History of Henry Fielding*, 2: 72.

23 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 209.

24 Thomas, *Fielding*, 381.

25 フィールディングの治安判事振りは、杓子定規に法律を解釈するのではなく、大岡裁きのな温情主義に基いている。スリに*Harlequin Sorcerer*入場に用意した金を盗まれて泣き伏す少女に、コヴェント・ガーデン劇場の入場券を与えたり、16歳の娼婦に闇組織の全貌を自白させ、その功に免じて彼女をデヴォン州に帰郷させたり、夫から病気を感染させられ、毛布を盗んだ咎で捕らわれた女を病院に収容させる等、フィールディングの道徳倫理観が遺憾無く発揮されている。

Cf. Battestin, 552.

- 26 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 192.
 27 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 193.
 28 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 196 & 198.
 29 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 198.
 See Roy Porter and G.S. Rousseau, *Gout*, 262.
 30 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 198.
 31 Dudden, *Henry Fielding*, 2: 1001.
 32 Thomas, *Fielding*, 390-1.
 33 Dudden, *Henry Fielding*, 2: 1006.
 34 拙稿、「諦観からの軌跡 *The Journal of a Voyage to Lisbon* を中心に」『言語文化』第7巻第4号（同志社大学言語文化学会、2005）
 35 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 219 & 230.
 36 拙稿、「火宅の人フィールディング」『言語文化』第8巻第1号（同志社大学言語文化学会、2005）
 37 弟ジョンは治安判事職を兄から継承したこともあり、遺族の生活工面に尽力した。兄の蔵書の処分、遺作となった『リスボン渡航記』の上梓、再発見された戯曲『善良な人』(*The Good-Natured Man*) の上演と出版、兄の負債処理等に有形無形の支援を果たし、自らの遺書の中で遺児達へ譲与金の分配を、妻に義姉へ配慮を請うている。
 Cf., Dudden, *Henry Fielding*, 2: 1060-73.
 38 Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, 225.

Fielding's Ardent Fight against Diseases: the Conflict between his Creative Power and Chronic Illness

Tatehiko NOGUCHI

Key words: Fielding, Bath, gout, dropsy

Judged from the drawing by William Hogarth, Henry Fielding seems a man of not fragile but robust constitution, although he suffered chronically

from gout. As to his food and drink, he has been believed to be quite liberal in his diet and used to freely drink in his earlier years. The tough constitution with which nature endowed Fielding began to show signs of strain as early as the winter of 1741-42; to cure gout, he would make repeated visits to Bath to take baths or drink the waters. In spite of all the treatments he received there as well as in London, Fielding died of liver cirrhosis in Lisbon in October 1754.

As for his wide company, based upon the rather general statements of his biographers, Fielding could keep in touch with the doctors of his former acquaintances through his painful experiences with of his own or his family's treatment. Among London doctors whom Fielding was under treatment for his chronic illness were Dr. John Ranby, George II's chief surgeon; William Hunter, Fielding's close friend; Joshua Ward of whom Fielding used to make fun but whose trochar was used to tap the fluid which distended Fielding's belly as a treatment for his dropsy; and Drs Thomas Brewster and Edward Harrington, classified as Bath doctors. As far as the time order of his treatment is concerned, it may be suggested that in the first or second stages of Fielding's illness, Bath doctors could make a contribution toward curing him; he was able to visit Bath from London, in spite of its being a long journey overland of one hundred and sixteen miles, spanning three days by carriage.

As hinted above, the process of disease was related to the time of his being a dramatist, a journalist, a novelist and a justice of the peace, and according to David Garrick, a well known Shakespeare actor at that time, the dramatist was immobilized by the gout even in his twenties. During his days as journalist and novelist, his chronic illness, especially in winter, would occasionally prevent him from writing fiction, though it seemed as if Fielding kept his mind on his creative activities without any nervous disturbances, considering all that he achieved during this time. It is during his time as a magistrate that Fielding faced the final stages of his diseases,

cirrhosis as well as gout, asthma and jaundice. Being in an appalling state of health, Fielding could no longer manage to visit Bath for treatment, but finally resolved to seek warmer climate abroad.

Those who have read Fielding's last work, *The Journey of a Voyage to Lisbon*, might be surprised at the amount of the fluid that distended his belly every time, due to the treatment for his dropsy, and at his trial of dosing a half-pint of tar-water twice a day, according to Bishop Berkeley's prescription. Throughout this hard struggle with illnesses, however, Fielding was absorbed in playing his roles of dramatist, journalist and justice of the peace at every stage of life. We have reason to suppose that it is his fighting spirit which, as a man of resolve, Fielding carries off through the ordeal of his struggle with chronic illness, never acknowledging having been defeated at all.